The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Art of Life Now : Theatrical Creativity of Contemporary American Playwrights |
| Author(s) | 森, 瑞樹 |
| Citation | 大阪大学, 2014, 博士論文 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/34540 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

# 論　文　内　容　の　要　旨

| 氏　名　（　森 瑞 樹　） | |
|---|---|
| 論文題名 | Art of Life Now: Theatrical Creativity of Contemporary American Playwrights<br>(今／生の芸術―現代アメリカ芸作家の演劇的創造性) |

論文内容の要旨

様々な文化的／社会的主義や思想の乱立とともに、アメリカ演劇自体もそれらの影響を受けている従来、このような文化的時代性の影響を考慮し、時代を映す鏡としてアメリカ演劇を捉えた文化研究が多くを占めていた。それゆえ、これまでにアメリカ演劇全体の特徴を捉えようとした先攻研究はほとんど存在しない。そこで、本博士論文では、黎明期から現代に至るまでのアメリカ演劇を時系列にそって分析することで、アメリカ演劇全体のひとつの特徴となるべきものを抽出しようと試みた。

まず第一章では、*The Indian Princess* (1808) と*The Gladiator* (1831)を論じる。両作の表象方法の分析を通して、独立期のアメリカが、国家的／個人的アイデンティティ形成を、演劇を通して行った過程を論証してゆく。アメリカ演劇黎明期では、アメリカ的アイデンティティを作り上げるために、創世記を借用し、アメリカをロマン化することで、創世記的な形而上的世界としてのアメリカの表象を可能とした。さらに、啓蒙思想に基づいた近代的知の諸分野の著しい発展がこのような形而上学的世界観の不在を明るみに出したアイロニーも検証する。

第二章では、ソーントン・ワイルダーの *The Happy Journey to Torenton and Camden* (1931)と*The Skin of Our Teeth* (1942)を検証する。帝国主義的アメリカとその正当化の技法について、メタ批評的観点も交えながら論じてゆく。歴史的文脈の延長線上にアメリカを位置づけながらも、アメリカを中心とした歴史的文脈の普遍化をおこなう帝国主義的メカニズムが、演劇的性質と非常に似通っていることが明らかになるだろう。

第三章では、テネシー・ウィリアムズの*Sweet Bird of Youth* (1959)について論じる。ウィリアムズの排他的自己表象の戦略に、新古典主義的審美観が色濃く影響を与えていることが明らかになっていく。そしてその排他的な側面が、現在のアメリカのエンターテイメント産業を力強く後押ししているという逆説的な側面も明らかになる。

第四章では、サム・シェパードの*Simpatico* (1995)に焦点を当てる。ポストモダンと呼ばれる現代において、またアメリカニズムが趨勢を極めた時代において、アイデンティティはどのような末路をたどるのか、という視点でこの章は論じられてゆく。そして、シェパードの自己表象という命題が示しているものは、実際の自分ではなく、理想的自己を探し続け、作り上げ続けるしかない、というあまりにもアメリカニズム的ポストモダンな現実である。

第五章では、アフリカン・アメリカンのオーガスト・ウィルソンの劇作理念とその作品が論じられる。ピッツバーグ・サイクルと呼ばれるサイクル劇の分析により、様々な社会的・文化的葛藤や問題を超越した時限での劇作を行おうとしていたウィルソンの姿を浮き彫りにする。さらにそれは、芸術とは何かという大きな問題に挑戦した作家の姿をも描き出してゆく。その結果、古典古代から脈々と流れ続けている芸術文化の系譜に、アメリカ演劇を確かに位置づけるきっかけとなる点も伺える。

初期アメリカ演劇から現在の演劇までを時系列的に、また包括的に検証していった結果、伝統の取り込みと、それらのロマン化、普遍化、さらにはアメリカ化という、無意識的に文化帝国主義を促進してしまう側面とアメリカ演劇のひとつの特徴賭することができる。つまり、アメリカ演劇の文学的想像力、また演劇的創造性の中に、文化帝国主義的無意識が取り憑いている。アメリカ演劇は、様々な芸術とのネットワークの中に位置づけられながらも、それに影響を与えた過去の偉大なる芸術文化を反復し、アメリカ化し、理想的現実を作り上げ続けてゆく。アメリカの劇作家たちは、その文学的、演劇的想像力を通して、その芸術において一貫して無意識的にではあるが文化帝国主義を促進してきたのである。

様式 7

# 論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏　名　（　森　瑞樹　） | | |
|---|---|---|
| 論文審査担当者 | （職） | 氏　名 |
| | 主 査　言語文化研究科教授 | 貴志　雅之 |
| | 副 査　言語文化研究科教授 | 渡邉　克昭 |
| | 副 査　言語文化研究科教授 | 畑田　美緒 |
| | 副 査　言語文化研究科准教授 | 中村　未樹 |
| | 副 査　九州大学大学院<br>言語文化研究院准教授 | 岡本　太助 |

## 論文審査の結果の要旨

本博士号請求論文 “Art of Life Now: Theatrical Creativity of Contemporary American Playwrights” は、アメリカ演劇とアメリカ文化・社会との歴史的照応関係に着目し、18・19世紀の黎明期より現代に至るアメリカ演劇の通時的分析により、現代アメリカ演劇の底流をなす特徴を抽出することを目指した論考である。独立戦争期前後より2世紀半に及ぶアメリカ演劇の歴史的歩みを文化的・社会的側面から検証し、その全体像と特徴を包括的に捉え、明確化した先行研究は数少ない。それはアメリカ演劇史の包括的文化社会研究の規模と射程が多大な時間と労力を要する困難なものであることを物語る。森論文の独自性は、現代アメリカ演劇に焦点を据えながら、その特徴の解明には現代に至るアメリカ演劇の通時的文化社会研究が必要との観点から、この壮大な研究課題に果敢に挑戦した点にある。本論文は時代を越えて各作家・作品を結ぶ線を領域横断的文献研究と演劇テクストの入念な検討・分析とダイナミックな議論によって浮上させ、アメリカ演劇の根幹に関わる結論を導き出す。この意味から本論文は野心的規模と射程の優れた労作として評価されるものである。

本論文は序論と結論を含め全７章から成る。序論では、まず、ギリシア、ローマの演劇、シェイクスピア劇への言及から各時代性を反映する芸術メディアとしての演劇の認識が示される。次いで、アメリカ独立戦争以降、現代に至るまで各時代の文化的影響と思想を反映し、生産し続けるメディアとして演劇を捉える本論文の基本的研究姿勢が打ち出される。そして、黎明期から現代に至るアメリカ演劇における特徴的劇作家の時系列分析によって、アメリカ演劇の根幹的な特質を解明するという本論文の意図と構成が各章ごとの要約を持って提示される。

第１章は、19世紀初頭のジェイムズ・ネルソン・バーカーの*The Indian Princess* (1808) とロバート・モンゴメリー・バードの*The Gladiator* (1831)の2作を取り上げる。今日もなおアメリカの国民的文化イコンとなっているポカホンタスとグラディエーターの人物表象が、独立から国家形成期のアメリカで国家・国民的アイデンティティ形成のメディアとなった演劇によって創世記的アメリカ神話の象徴として生産され、現代に至るまでアメリカ国民共有の文化的イコンとして流通するプロセスとメカニズムが精緻な分析により論証される。

第２章では、20世紀前半ユージン・オニールとともに演劇界を牽引したソーントン・ワイルダーの *The Happy Journey to Torenton and Camden* (1931)と*The Skin of Our Teeth* (1942)が、アメリカニズム、アメリカ帝国主義との共犯関係から論じられる。ここで、多様な文化・歴史的モチーフを取り込みながら、悠久の過去から久遠の未来へと繋がる歴史的脈絡のなかで新たな世界創造の旗手アメリカという国家的イメージを投影するワイルダー作品の戦略と、世界に覇権を拡大するアメリカの帝国主義との連動・共犯関係が詳述される。

第３章は、第2次大戦後のアメリカ演劇をアーサー・ミラーとともに代表するテネシー・ウィリアムズの*Sweet Bird of Youth* (1959)を扱う。ここでは、ウィリアムズの自己表象が作品の主人公の人物造型、個人と社会との関係性のなかに検証される。一方で他者を寄せ付けない個人のナルシシズムと排他性、他方でそうした個人を異質で害をなすものとして排斥する社会の排他性という二面を比較対照させ、多数と異なる独自性を持つ個人（芸術家）のあり方と自己表象の問題が精緻な分析によって詳述されていく。最終的に作品化されるウィリアムズの演劇的自己表象が被支配的な文化・社会的遺産に依拠しつつ、支配的アメリカ文化を代表する表象の一つとして受容され、流布する矛盾を鋭く明らかにしている。

第４章は、ウィリアムズとミラー以後、エドワード・オールビー、デイヴィッド・マメットとともに1960年代以降

の演劇を牽引し、現代に至るまで演劇と映画の両ジャンルで問題作を発表し続ける
サム・シェパードの1995年作品 *Simpatico* を論じる。ポストモダン・アメリカにおける個人のアイデンティティ問題を焦点化し、あるがままの自己ではなく、理想的自己像を際限なく生産し続ける一方、確固たる自己表象を見出し得ないまま、浮遊する自己像に縛り付けられる現代人、延いては作家シェパード自身の姿を浮上させる。そして、自己に及ぼすアメリカの文化的社会的影響力を意識できない程にまでアメリカ化された個人の姿を読み解く洞察に富む分析が示される。

第５章では、1980年代から逝去の年の2005年まで、20世紀アメリカ系アメリカ人物語となるピッツバーグ・サイクル全10作を完成したアフリカン系アメリカ人劇作家オーガスト・ウィルソンの劇作理念と作品が検討される。ここで、ウィルソンのエッセイと作品が丹念に読み解かれ、ヨーロッパ演劇の芸術伝統を踏まえ、ブラック・ナショナリズムに与することなく、アメリカ演劇に不可欠な貢献をなす新たな黒人演劇の創造と発展を目指したウィルソンの劇作理念と実践が検証される。一方、ウィルソンがヨーロッパ演劇の文化伝統をサイクル創作によって新たなアメリカ文化形成へと取り込むことでアメリカ化し、結果的に無意識裡にアメリカ文化帝国主義に与するという、斬新な論議を導き出している。

結論では、通時的かつ包括的なアメリカ演劇の検証から、先行する文化伝統の取り込みとそのアメリカ化によるアメリカ文化帝国主義促進への無意識的関与と共犯関係がアメリカ演劇に通底する特徴であるとする刺激的かつ挑発的な主張で本論文を締めくくっている。

以上のように、本論文は個人研究として極めて困難な通時的・包括的なアメリカ演劇研究を精緻なテクスト分析と先行研究の綿密な検証作業によって行い、アメリカ演劇の文化・社会との歴史的照応関係からアメリカ文化帝国主義促進のメディアとしてのアメリカ演劇の特質を浮上させた。この点で、アメリカ演劇研究の新たな準拠枠と課題を提示した本論文の功績と意義は大きい。

しかし一方で、今後に向けて解決すべき課題として、以下の問題点が審査担当者から提示された。テーマそのものが大きすぎるため、問題点を特定することが困難ではないか。議論の対象となった作品および作家の選択基準が不明確である。アメリカ演劇のシアトリカリティ自体をより具体的かつ精緻に考察する必要性がある。これらの問題以上に、審査員から一様に指摘されたのは、アメリカ文化帝国主義促進への関与をアメリカ演劇の特徴とする結論が孕む問題である。時代を越えて多様なアメリカ演劇の作家が支配的アメリカニズムに異議を唱え、告発する作品創作・演劇活動を展開してきたことは事実であり、その営為自体がアメリカ文化帝国主義へのアメリカ演劇の無意識裡の加担を意味するという結論は、アメリカ演劇の歴史的営為の表象的特質を示す議論とは言い難い。また、人種的、宗教的、民族的、文化的多様性と多様なセクシュアリティのあり方が存在するアメリカにおいて、国の明確な文化帝国主義を措定することの困難も指摘された。

以上の指摘は、上記の結論が本論文最大の問題であることを明確化し、その抜本的見直しを要請するものである。アメリカ演劇が様々なレベルで帝国主義・文化帝国主義に対し共犯と拮抗・対抗という、相反する関係性を併せ持つことは否めない。問題は本論文の議論が両者の共犯関係だけを焦点化する方向に向かった点にある。アメリカ演劇は文化帝国主義との関係性だけに収斂されえない多様な側面を持つからである。しかし結論の評価によってのみ本論文全体の評価とすることも問題である。文化・社会的コンテクストから各時代の作家・作品を丁寧に検証し、それらを包括した通時的アメリカ演劇研究を目指した本論文は、野心的規模と射程、綿密なテクスト分析と領域横断的検証作業に裏打ちされた実証性、さらに数々の洞察力に富む優れた議論を展開し、新たな先進的研究の確かな萌芽を窺わせるものである。

以上から、本審査委員会は結論部の再考・再検証を論文執筆者の今後の課題とした上で、執筆者のさらなる研鑽と研究の飛躍に期待し、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのに値する研究であるとの結論に達した。